

第 27 回公衆衛生情報研究協議会研究会　ならびに　性感染症発生動向調査活用　ガイドラインおよびエイズ・性感染症対策に関する検討会　に参加して

大阪市保健所感染症対策課　奥町　彰礼

今回は、大阪市保健所の HIV・性感染症対策担当者のひとりとして、上記研究会のうち性感染症対策に関するシンポジウムに絞って参加させていただいた。

私はこの研究会へは初めての参加であった。第一印象として、地方衛生研究所関係の方の参加が多いような感をうけた。保健行政一年目としては、話題のフォローだけで汗顔しきりであったが、普段と違う視点での他施設スタッフの話聞くことは頭の切り替えにも役立った。以下に印象に残る話題について、キーワードの羅列的に述べる。

「対策につなげるサーベイランス (surveillance for action)」という概念が幾度か出されていた。もちろん今回は性感染症についての話を基調として強調されていたのだが、これは感染症全般についても同様に念頭におく必要があるものだろう。

基本的に異論を挟む余地のない概念だが、「サーベイランスのためのサーベイランス」になっていないか、という注意をもってこういった事業をみていく、ということだと考えている。

「性感染症のアウトブレイク」という概念について。性感染症にもアウトブレイクが存在するのだ、ということが強調されていた。個人的に、これまでこれを意識することはなかったとの感は否定できない。呼吸器感染症や消化管感染症といったものに比し、性感染症の伝播は、時間・速度的ダイナミクスといった点で独自の特性を帯びているため、アウトブレイク、という用語を連想しにくいのではないかと考えている。

「性感染症に対しての口腔咽頭感染把握からのアプローチ」という点では、大阪市の現体制について認識が不十分であったとの感は否めない。具体的にはうがい液を検体として病原体検索に供するということだが、寡聞にして知らなかった。改めて大阪市での実態を確認するとともに、有用性・実行可能性についての検討や今後の対応のあり方については関係スタッフにも諮り協議していきたい。

後半では会場を移して、研究班を中心とした 10 名程度のメンバーで性感染症発生動向調査の解析ならびに情報交換の機会を得た。具体的には梅毒の最近数年の動向などが話題にあがった、大阪市でも少なくともここ 3 年梅毒は増加の一途をたどっており、他自治体でも同様の傾向であった。ここでもアウトブレイクとしての捉え方が話題にのぼった。細かな定義というよりは「ベースラインから想定される以上の増加」という概念的な面もあるようで、捉え方の難しさを改めて感じた。

大阪市の HIV 対策では、MSM を対象の中心として、イベント検査の実施など各事業を展開している旨の話題も提供した。その際、HIV 以外の性感染症への対策の扱いの大小について市の現状如何、の質問をいただいたが、個人として把握不十分であり、的確な返答

ができなかったことは残念であった。

いずれにしても、今回関係諸先生と初めて顔合わせをし、情報交換できたことについては、今後にとって大きな意味があったことと思っている。

最後に、今回の研修を有意義なものとしていただいた中瀬先生はじめ参加各先生方、また、参加に際して多大な支援をいただいた大阪市保健所感染症対策課のスタッフの方々に心より感謝を申し上げ、今回の感想とさせていただきたい。

平成 26 年 2 月 6 日